

# 2026年高等学校生徒セラミック作品展

全国のセラミック関連の高校より、生徒の作成した作品を出品いただき、  
ホームページ（ <https://www.ceramic.or.jp/about/education.html#artwork> ）で紹介しています。

	No	作品名	学校名	作者氏名
	1	古池	福島県立会津工業高等学校	遠藤万里
	2	水の臓器	福島県立会津工業高等学校	薄葉心美
	3	茶弥	福島県立会津工業高等学校	齋藤汐李
	4	野球ボール	岐阜県立多治見工業高等学校	松本脩暉
	5	縄文土器	岐阜県立多治見工業高等学校	酒井啓年
最優秀賞	6	壺の習作	佐賀県立有田工業高等学校	大塚王我
	7	フラミンゴリラ	佐賀県立有田工業高等学校	古賀柚芭
	8	深皿	佐賀県立有田工業高等学校	松尾龍弥
	9	絵付け皿阿修羅	滋賀県立信楽高等学校	高橋慶太
	10	練り込み陶器ホッとするコップ	滋賀県立信楽高等学校	長嶺拓海
	11	信楽焼穴窯引出焼締花器	滋賀県立信楽高等学校	金澤真叶
	12	イルカへの思い	滋賀県立信楽高等学校	金澤真叶
	13	ブルーシー（BLUE SEA）	大阪府立泉尾工業高校	仲村瞬吾
	14	海の物語	大阪府立泉尾工業高校	手島弘輝
	15	血の飛沫と海の仲間	大阪府立泉尾工業高校	大伴一護
	16	ハニコップと愉快的仲間	大阪府立泉尾工業高校	阿部立直
	17	ステンドグラス技法による常夜灯カバー	大阪府立泉尾工業高校	阿部立直、大伴一護、奥谷侑真、北田凜、下村寧音、仲村瞬吾
優秀賞	18	Im-Dazwischen-Sein	長崎県立波佐見高等学校	長岡拓巳
優秀賞	19	チューリップ	長崎県立波佐見高等学校	池部侑依
	20	紅泡	長崎県立波佐見高等学校	松瀬美澗
	21	kai	長崎県立波佐見高等学校	山浦心美
	22	PIZZA	長崎県立波佐見高等学校	久米美里
	23	助走	愛知県立常滑高等学校	山口義弘
	24	TOKONAME \$COTT	愛知県立常滑高等学校	加賀大喜
	25	旅立ちの日	愛知県立常滑高等学校	上野楓馬
	26	メドゥーサと四天皇	愛知県立瀬戸工科高等学校	渋谷皓喜
	27	今日はどう並べる？	愛知県立瀬戸工科高等学校	山田果梨
	28	喫食	愛知県立瀬戸工科高等学校	吉筋萌
	29	瀬戸工科高校×ぱんだ家プリンカップ制作	愛知県立瀬戸工科高等学校	吉筋萌、川合史織、梶尾雅姫、前田澄美蓮
	30	ハイドロボールの研究	愛知県立瀬戸工科高等学校	清水なほ、杉本絢音、竹重麗心



ふる いけ  
古 池

出品者所属・氏名：福島県立会津工業高等学校・遠藤 万里

この作品のタイトル「古池」の由来は、使用した施釉方法にあります。青緑色を基調とした釉により、静かな自然の中にそっと佇んでいるような厳かさと、不完全でありながらもその不完全さの中にある静寂の中の美を感じさせるような器になっています。完全な緑色ではなく、少し色が濁ったような配色にすることで、自然と調和し、長年その場所に存在していたような時の流れを感じさせてくれます。外側の茶色は、赤土の本来の色合いを生かしつつ、水のしみ込んだ土の香りがふわりと香り、陽光に照らされて池の石に生えたコケや草花たちが光を浴びているような色合いにしました。

また、器の内部にある渦の模様は、水面に落ちる一滴のしずくが、古池全体にゆっくりと広がっていく様子を表現しています。

作品サイズ 縦 16cm×横 16cm×高さ 10cm



みず ぞうき  
水の臓器

出品者所属・氏名：福島県立会津工業高等学校・薄葉 心美

この作品のタイトルの「水の臓器」の由来は、壺の色合いにあります。この壺に満たされた水は、風景でも装飾でもなくそれは、身体の内側にひっそりと存在する臓器のようなものである。濃い青と濃い緑は、海や自然を指し示すための色ではなく、目に見えない内側

記憶、感情、無意識が滞留する場所の色である。濃い青は水を表現し、濃い緑は臓器を表現しました。水には「生命・記憶」という意味があり、臓器には「内部・生命維持・壊れやすい」といった意味があります。

水を器に収めた作品ではなく、器そのものを身体とし、水はその臓器として扱う試みを表現する作品です。

作品サイズ 縦 17cm×横 17cm×高さ 15.5cm



さ や  
茶 弥

出品者所属・氏名：福島県立会津工業高等学校・齋藤 汐李

本作は、焦げ茶色の釉がもつ深さに着目し製作した壺です。「茶弥」という名前は、日常に寄り添う茶の静けさと、弥生のように広がり続ける気配を重ねています。焼き上がった釉面には、光の当たり方や視点の違いによって異なる表情が生まれ、壺の輪郭や内部空間にまで奥行きを感じさせ静かに意識されます。作品は完成ではなく、展示空間の中で在り続けるものです。また、日常の中にある「静けさ」や「溜まる時間」を感じ取ってもらえれば幸いです。

作品サイズ 縦 14cm×横 14cm×高さ 16cm



## 野球ボール

多治見工業高等学校・松本 脩暉

私は、野球ボールを制作しました。電動ろくろを使い球体の形を作り乾燥後、カンナを使い丸く削り細かな箇所はやすりなどを使用し球体に近づけました。乾燥後 800 度の素焼きを経て野球ボールの網目模様をつけるため下絵付けをしました。釉薬は乳白釉を使用し、乳白釉をかけた上から原土をまぶし使用感を表現しました

寸法 高さ 80mm 横幅 450mm 奥行 450mm



## 縄文土器

多治見工業高等学校・酒井 啓年

学校敷地内の原土を採取して学校で使ってる粘土を合わせて手びねりで成形しました。側面は板状に伸ばして張り合わせ、装飾はひも状の粘土とヘラを使って施しました。縄文土器を参考にした鉢型の器を表現しました。側面にはジグザク模様や刻み模様、上部には渦巻状の装飾を施しました。

寸法 高さ 190mm 幅 230mm 奥行き 230mm



【寸法：幅×奥行×高さ(mm)】

左より 220×220×275

215×215×230

225×225×260

## 壺の習作

出品者所属・氏名：佐賀県立有田工業高等学校 定時制課程 セラミック科・大塚 <sup>おおつか</sup> <sup>おうが</sup> 王我

高い難易度のろくろ成形に挑戦したいと思い、全国統一陶芸技能検定（ろくろ検定）の上級の課題である壺を作りました。

壺の形がひとつひとつ違うので、作った壺の特徴を活かしそれぞれに合う装飾を施しました。

縦長の壺は長さを生かして縦に模様を入れ、高台周りに厚みのある壺は面取りをして多角形に、下絵具を洗剤に溶いて泡を作り模様にしたたり、和紙染めや吹き墨の技法を用いたりしています。

絵の具や釉薬の色が綺麗に出てよかったです。



【寸法：幅×奥行×高さ (mm)】：520×390×520 x x x

## フラミンゴリラ

出品者所属・氏名：佐賀県立有田工業高等学校 全日制課程 セラミック科・古賀 <sup>こが</sup> <sup>ゆずは</sup> 柚芭

高校最後の集大成である課題研究での制作だったので、大きな作品を作りたくて好きなピンクを使ったゴリラのオブジェを作りました。作品はひもづくり成型で1本1本土台から積み上げて成形しました。ゴリラを作ることは難しく、何日もかけて仕上げました。毛並みを一つ一つ丁寧に表現したところが見所です。



【寸法：幅×奥行×高さ (mm)】：3点ともに 250×250×150

## 深皿

出品者所属・氏名：佐賀県立有田工業高等学校 全日制課程 セラミック科・松尾 <sup>まつお</sup> <sup>りゅうや</sup> 龍 弥

私の作品のコンセプトは、学んだことを生かした作品作りと、ろくろ技術と絵付けでの表現です。

特に見どころは絵付けで、絵付を中心的に取り組みました。絵付けは迫力があり目を引くデザインに仕上げることが意識しました。線の太さやグラデーションにもこだわって描きました。また、器の重さや厚さにも注意し、サイズは大きすぎず、小さすぎず、バランスのとれた大きさに仕上げました。



「絵付け皿 阿修羅」

高さ 3 cm幅 22 cm奥行 22 cm

滋賀県立信楽高等学校総合学科セラミック系列3年・たかはし高橋 けいた慶太

絵付けを3年生の実習で学び、基本から応用をしてきました。自分で制作した皿に阿修羅を描きました。仏のパワーをお皿に取り入れ縁起のいいお皿を完成させました。細かい作業ではありましたが、色分けを工夫し、周りの模様もこだわりを持って制作しました。



「練り込み陶器 ホットするコップ」

高さ 10 cm幅 10 cm奥行 10 cm

(1 つ寸法)

滋賀県立信楽高等学校総合学科セラミック系列3年・<sup>ながみね</sup>長嶺 <sup>たくみ</sup>拓海

授業の中で制作した練り込み陶器です。赤土と白土を混合し、ろくろ成形の回転を利用し、赤土と白土のコントラストを表現しました。ほっこり利用してもらえるように、温かみと疲れた体を包み込むようなコップをイメージして制作しました。



「信楽焼 穴窯引出焼締花器」

高さ 20 cm幅 7 cm奥行 7 cm

滋賀県立信楽高等学校総合学科セラミック系列2年・かなざわ金澤 まかな真叶

信楽の伝統焼を通して、本校の穴窯で焼成した作品です。1300℃まで温度上げ途中ひっかけを利用し、高温の中から作品を引き出しました。急冷により溶けたビードロが緑色に変色、神秘的作品ができました。土味を活かし、自然の力を表現した作品です



高さ 42cm×幅 58cm×奥行き 55cm

## イルカへの思い

滋賀県立信楽高等学校総合学科セラミック系列2年生 かなざわ 金澤 まかな 真叶

実習授業では「かわいい海の生き物」をテーマに作品を制作しました。幼少期から海や川の生き物に魅了され、観察を続けてきた私にとって、特に心に残っている存在がイルカです。

本作品では、海面から優雅に顔をのぞかせ、こちらの差し出すエサに嬉しそうに応えるイルカの姿を表現しました。幼い頃に感じた“生き物と心が通じ合う瞬間”を、自分なりの視点で形にした作品です。



標題：ブルーシー（BLUE SEA）

出品者所属・氏名：大阪府立泉尾工業高等学校 セラミック科 なかむら 仲村 しゅんご 瞬吾

大きさ：前列中央やや左の「亀」で幅 20cm 程度、右後端のルリ色花瓶で高さ 25cm 程度

制作時間：36 時間（計画～まとめ報告を含む総時間）

ルリ色の花瓶：青が元々好きで、ドラクエのスライムが好きなので、スライムに挑戦したかった。それで、ルリ色のガラスを選んで大きめのものを吹いた。ルリ色ガラスはなかなか溶けなかった。溶けたら今度は、紙りんを当てても固まらず、かたちが作れなかった。形がある程度できたので、再び柔らかくして形を整えようと思ったら、こんどは、また、なかなか柔らかくならず、とつぜん柔らかくなった。ガラス竿についている部分を柔らかくして成形して、スライムらしくしたかったけれど、その部分を柔らかくしようと思うと、底の方は柔らかくなりすぎて崩れてしまいそうだった。それで段がついたフラスコみたいな形になってしまった。色がうまく行ったのがよかった。

亀：ルリが海を連想させるので、先輩の作った亀を見本に挑戦した。ルリはむつかしいので、透明でつくった。まず丸いものを作って、平らな台の上で幅を狭めて亀の甲羅にした。このとき吹き竿は、尻尾のところについている。最初に頭と目をつけて、つぎに後ろ足、最後に前足をつけた。その順じゃないとうまくつかない。それから吹き竿を切り離しポンテ竿に移し替える。ポンテは目立たないように、カメの腹につけた。これが大変だった。吹き竿とポンテ竿が直角に交わるので、吹き竿を回して切り離すことができず、ヤスリの方を回して切った。手間取って冷えすぎたので、一部にひびが入ってしまった。でもなんとかそれらしいものができた

四角：木型を組んでその中で吹いて四角い青いグラスを作った。型の中は見えないので、どれだけ吹いたら整うのか、勘で何回か試すしかなかった。意外とむつかしい。





## 標題：海の物語

出品者所属・氏名：大阪府立泉尾工業高等学校 セラミック科・手島 <sup>てしま</sup> <sup>こうき</sup> 弘輝

大きさ：前列中央やや左の「亀」で 20cm 程度、左端手前の花柄ガラス塊で 6cm 程度

制作時間：36 時間（計画～まとめ報告を含む総時間）

きっかけ：「海」をテーマにしたきっかけは後列右のフグ形のカップです。予定は、平らな取っ手を横向きに二つつける予定でした。まちがって縦にしてしまいました。しかたないので、目をつけてフグにしました。

さかな：先輩が作って残っていたサカナを作ってみたいと思いました。まず細長いグラスとおなじように作り進め、底を平らにする代わりにペンチで引いて、尾びれにします。そのあと、フグと同じように、溶けたガラスの塊をつけて、ペンチではさんで平らにしてひれにします。つける量がむつかしく、思ったより多くつきすぎてしまいました。

泡模様コップ：真ん中後ろの泡模様のジョッキグラスは、偶然できました。ガラスを竿に三回つけて大きなかたまりを作り、それを吹いてジョッキにします。三回目のとき、重すぎて形がゆがみ、形がくずれてしまいました。先生に形を戻してもらいましたが、二回目に吹いた時の空気が小さく壊れてガラスの中に残ってしまいました。でも、面白い模様になってよかったです。

カメ：仲間がカメを作ったので自分もやってみました。甲羅の様子は、熱いときに水に沈めてひび割れさせて作ります。ひび割れ模様のガラスは、左後ろの緑の小物入れで試しました。本番のカメの時は、気合いを入れて色ガラスを多くつけ過ぎて、重くてうまく回せず、ひび割れがきつくなってしまいました。できたひび割れはもう一度熱くしてそれ以上割れないようにするんですけど、一部のひび割れはうまくつながらず残ってしまいました。仲間と違って先にポンテを付け替えました。そしたら目が、つける方向が普通と 90 度違う角度になるので、とてもつけづらかったです。





## 標題：血の飛沫と海の仲間

出品者所属・氏名： 大阪府立泉尾工業高等学校 セラミック科・大伴 おおとも いちご 一護

大きさ：前列中央の「タコ」で 15cm 程度、左後列の黄赤模様の花瓶で高さ 35cm 程度

制作時間：36 時間（計画～まとめ報告を含む総時間）

きっかけ：赤が好きです。ゲームでも鮮血カラーが好きでよく選びます。それで色は、赤いものを多く使いました。あまり器用でないで形がゆがむことが多かったです。それが海の生き物っぽいので、ひれとかつけて、気に入った形にしました。

たこ：海の生き物のにすると決めて、はじめはイカをつくるつもりでした。先生と一緒に、どうやったらイカができるか考えました。けれど、吹いて回すやり方では、イカの足が作れないとわかりました。それでタコにしました。もう少し大きくしたかったけど、それだと遠心力が強すぎて足が変になって失敗しました。小さめに作ったら、狭いところに 8 本の足をつけるのがたいへんでした。それでも、竿を回すと足が伸びるし、回さないと垂れてきて変なところに足の反対側がくっつくので、難しかったです。

チンアナゴ：水族館のチンアナゴを育てるゲームがおもしろかったので作ろうと思いました。細くするほど難しくなるので、できた細さが限界でした。黄色と赤の縞模様にしたかったけれど、ねじれて斜めになってしまいました。友人はチンアナゴっぽくないといいますが僕の中ではかわいいチンアナゴです。

赤いの：血潮のような赤いガラスがあったのでそれで作ってみようと思いました。赤いガラスを徐冷窯であらかじめ温めておいて、それから竿につけて溶かします。溶けている間、ガラスの色は真っ黒になります。だから、空気がどれだけ入っているのか外から全然見えません。吹き終わって冷めてから、成功か失敗か分かります。赤は大変です。



## 標題：ハニコップと愉快的仲間

出品者所属・氏名：大阪府立泉尾工業高等学校 セラミック科・阿部 あべ 立直 りいち

大きさ：前列のジョッキ類はいずれも高さ 15cm 程度

制作時間：36 時間（計画～まとめ報告を含む総時間）

説明：色々な形が思いつかないので、コップや取っ手付きのコップばかり作っていました。取っ手は普通、上を先につけて、下を後でつけます。なぜなら、溶けたガラスは、ガラスにつきますが、固まったガラスは付かないからです。

コップの形ができた後、ポンテ竿の先に溶けたガラスをつけ、それをコップにつけた後、伸ばして取っ手にします。その伸びたガラスを切るときに、切り口が固まるので、反対側の切った端はコップにつきません。反対側は、切ったすぐ横をガラスにつけます。そうやっているうち、何を思ったのか、先に取っ手を下につけてしまいました。思い直して、切った端を上をつけようと思ったのですが、溶けたガラスをつかむためのジャックの持ち方はいつも通りなので、手首が逆方向に回せません。そうこうしているうち、取っ手の途中部分がくっついてしまいました。それが、頭を抱えている人の手に見えたので、取っ手を二つにして、悩む人っぽいハニワ形にしました。

ハニワ形のコップは、ペン立てや置物にちょうどいい大きさだったので、つぎは計画してハニワにしました。普通通り、上から取っ手をつけると、こんどは腕を腰に当てて偉そうにしている人っぽくなりました。

取っ手は、取っ手用のガラスの量がうまく調整できず、大きすぎたり細すぎたり難しかったです。慣れてハニワに挑戦できるようになるまでが大変でした。



## 標題：スタンドグラス技法による常夜灯カバー

出品者所属・氏名：大阪府立泉尾工業高等学校 セラミック科・

あべりいち おおとも いちご おくたに ゆうま きただ りん しもむら ねね なかむら しゅんご  
阿部 立直, 大伴 一護, 奥谷 侑真, 北田 凜, 下村 寧音, 仲村 瞬吾

大きさ：12×10×10cm が 6 個

目的：卒業を前に、育ててくれた保護者へ感謝の気持ちを込めた贈り物として作りました。ガラスを使った実用的な置物を考え、昨年度先輩が残したスタンドグラスを参考に、市販の常夜灯に被せるカバーを作ることになりました。

製法：まず下絵デザインを描きます。次にデザインに従ってガラスを切断します。切断したガラスの端面を研磨した後、銅テープをまき、半田で固定します。それを組み合わせてさらに半田で固定し、1面ができあがります。このとき、半田を盛り上げるようにつけると、スタンドグラス特有の風合いが出ます。底面を除く5面を半田で固定します。最後に半田を腐蝕させてアンティーク調に仕上げます。

制作時間：36 時間（計画～まとめ報告を含む総時間）

阿部：形が対称になるように自分なりのセンスで作りました。一つだけ形がバラバラなのは自分の性格を表しています。

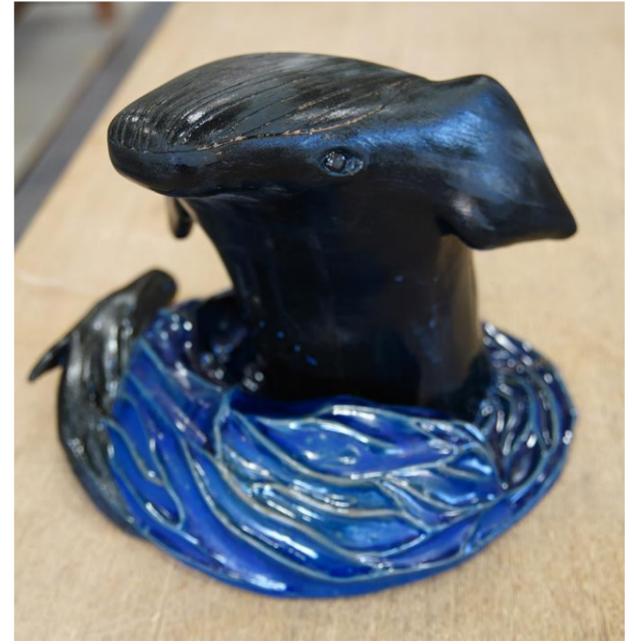
大伴：この作品で一番工夫したのは星です。この星をイメージしたのはヒトデマンというキャラを思って作りました。

奥谷：原色を使ってカラフルに仕上げました。またアニメキャラの耳飾りのイメージを元に工夫しました。

北田：この作品は、くちばちをイメージしました。イメージカラーの緑をメインに完成させました。

下村：この作品は自分でデザインを考えて設計図を作成しました。お気に入りマイクラのネコです。

仲村：この作品は、私は青色類が好きなので、できるだけ青色をメインにしました。



縦 400 mm×横 400 mm×高さ 330 mm

## Im-Dazwischen-Sein (イム・ダツヴィツシェン・ザイン)

長崎県立波佐見高等学校・<sup>ながおか</sup>長岡 <sup>たくみ</sup>拓巳

「Im-Dazwischen-Sein」は、ドイツ語で「間に在るもの」を意味します。ブリッジする鯨と、水中へと戻っていく鯨の二つの姿をモチーフに、海と空、生と死といった相反する世界の「あいだ」に存在する状態を表現しました。

鯨は呼吸のために海と空を往復する生き物で、その姿は境界を越えながら生きる存在そのものだと感じています。本作では、どちらか一方に定まるのではなく、いろんなところを旅する様子を形と質感を通して表わしました。



縦 330 mm×横 300 mm×高さ 400 mm

## チューリップ

長崎県立波佐見高等学校・池部 侑依<sup>いけべ ゆい</sup>

私の母親を花に例えるとチューリップが思い浮かんだので、形にしてみました。チューリップは柔らかく包み込むような形と、咲いては散るはかなさを併せ持つ花なので、強さの中にある静けさや、儂げな印象を表現しました。

成形では花びらの開き方や葉っぱの重なりに変化を持たせ、自然な表情が生まれるよう工夫しました。釉薬の色合いには母の好きな紫色を取り入れ、完成した作品を母親にプレゼントしたいと思います。



縦 350 mm×横 350 mm×高さ 220 mm

## 紅泡

長崎県立波佐見高等学校・まつせ みお松瀬 美滯

泡のように儂く揺れ動く金魚の姿をモチーフに、水の中に生きる命の一瞬の美しさを表現した陶芸作品です。金魚の赤は生命の象徴として捉え、強さだけでなく、消えてしまいそうな繊細さを感じられる色合いを意識しました。

形は流れに身をまかせるような柔らかな曲線で構成し、水中を静かに泳ぐ様子を表現しました。また、表面の質感や釉薬のにじみを泡の揺らぎになぞらえ、現れては消えていくような儂さを表しました。



縦 380 mm×横 350 mm×高さ 330 mm

kai

長崎県立波佐見高等学校・山浦 やまうら 心美 ここみ

海と貝の持つ生命力を表そうとして制作した陶芸作品です。割れやうねりを意識した造形によって、貝が静かに開く一瞬と、絶えず形を変える波の動きを一つの形の中に重ね合わせています。

硬さと柔らかさといった反対の要素が共存することで、自然が持つ緊張感やリズムを表現しました。表面の質感は、光を受けて変化する海の表情を思わせ、艶消しの水色の釉薬をかけて薄暗い様子にしました。

観る人によってそれぞれが海や貝、あるいは別の自然の形を思い浮かべてもらおうと嬉しいです。



縦 330 mm×横 330 mm×高さ 110 mm

## PIZZA

長崎県立波佐見高等学校・久米 <sup>くめ</sup> <sup>みさと</sup> 美里

身近で親しみのあるピザをモチーフに、日常の中で使う楽しさを感じられる陶芸作品を制作しました。誰もが知る形だからこそ、見た瞬間に親しみを持ってもらえることを意識しました。

具材部分は一つひとつ立体的に表現し、絵具や釉薬の重なりによって本物のピザのような色合いや質感を追求しました。

また、ピッツァの部分が蓋になっていて取り外しができる構造になっており、器としての機能性も備えています。鑑賞するだけでなく、実際に使うことで楽しさが広がる作品を目指しました。



350 × 1100 × 850 W × D × H

## 助 走

愛知県立常滑高等学校 山口 義弘

私が高校で学んで身に付けた力は将来に生かすための大切なステップです。今はまだ「助走」の段階なのでこの勢いを緩めることなく力強く踏み出すという意味を込め、「助走」というタイトルにしました。作品に対する感想は、人間の足を再現するのは大変難しいと思いました。特に膝から足首を制作する際、重みで潰れてしまうところに苦労しました。下半身だけの表現にした理由は、足の細部に注目してほしかったからです。



550×550×550 W×D×H

TOKONAME SCOTT

愛知県立常滑高等学校 加賀 大喜

僕がなぜこの作品をつくったかというと常滑のライブがもっと盛り上がるようにという思いを込めて作りました。常滑では色々なアーティストがライブなどを行っています。僕が好きなUSラッパーと常滑を組み合わせで創りました。制作で大変だったのは、細かなパーツではなく、作品のフォルムです。特に顔の凹凸を表現するのが難しかったです。自分の創りたいものを思うように創れたのはとても幸せな時間でした。



350×860×360 W×D×H

## 旅立ちの日

愛知県立常滑高等学校 上野 楓馬

卒業といえば旅立ち、そして旅立ちとは何かを考え、船で海を渡る様子が思い浮かんだので、船をモチーフに旅立ちを製作しました。3年間の喜びや苦労を表現するために、赤や緑といった色で少し汚れた雰囲気を出しました。また、自分の手で創り上げた船という設定で小屋、樽、旗、木版の身近にあるようなものを組み合わせた感じの素朴なデザインにしました。



縦 900 mm × 横 900 mm × 高さ 402 mm

## メドゥーサと四天皇

出品者所属・氏名：愛知県立瀬戸工科高等学校・<sup>しぶや こうき</sup>渋谷 皓喜

僕は民族的な仮面や神話上の生き物の不気味な感じや不思議な世界観が好きで、それを立体作品にしたいと思い制作しました。民族的な仮面の要素と神話上の生き物を混ぜるため、複数の要素を一つにまとめたオリジナルの架空の生物をまずは四体作りました。そしてその四体をまとめる親玉として、個人的に好きなメドゥーサを作ることにしました。

こだわった部分は、大きく二つあります。一つ目は、五体とも身体の一部に三つ編みや四つ編みを施したところです。そして二つ目は、メドゥーサの身体に施した蛇の部分を粘土特有の柔らかい表現にしようとしたところです。

最初は、色も民族的な仮面や神話上の生き物のように、少し不気味な色にしようと考えていました。しかしあまりにも不気味な色にしてしまうと好みが変わってしまい、様々な方に見てもらえないのではないかと思います、万人受けしそうなカラーリングにしてみました。

高校三年間で学んできた知識や技術を活かし、自分の作りたい世界観を表現することができました。



1 枚皿：縦 220 mm × 横 200 mm × 高さ 25 mm  
5 枚組：縦 510 mm × 横 460 mm × 高さ 25 mm

## 今日はどう並べる？

出品者所属・氏名：愛知県立瀬戸工科高等学校・やまだ かりん 山田 果梨

私は、食事の時間を食べる楽しみだけでなく料理を並べる楽しみや目で楽しむなどのいろいろな「楽しむ」の要素を大切にしてほしいと思い、並べる楽しみがあるお皿を作りたいと考えました。そこで、組み合わせると別の形になるという要素を加えたお皿を思いつきました。

このお皿を活用することにより、並べ方や数・色によって並べるという一つの作業が色々なバリエーションを考えながら「今日はこの並べ方にしよう」「この色とこの色を並べてみよう」というような楽しみが生まれると考えました。私が実際に作ったお皿は、1枚が花びらの形になっており、組み合わせると花びらを持つ花の形になります。組み合わせる角度や色、順番を変えることで、花びらの数を自由に換え、様々な形の花を作ることができます。また、並べ方をわざとバラバラにして、自分なりの並べ方を考えることができ、花以外の形にも置くことができるようになります。使う人達が自由に組み合わせ方を考えられる作品になりました。

組み合わせで花という一つの形しかできないよりもいろいろな形で並べられる、自由度が高い作品へと完成させることができ、初めに考えていた案よりもいろいろな「楽しむ」を感じられる作品にすることができました。



縦 220mm × 横 500mm × 高さ 200mm

## 喫食

出品者所属・氏名：愛知県立瀬戸工科高等学校・吉筋<sup>よしすじ</sup> 萌<sup>もえ</sup>

ダイオウグソクムシは深海に住み、魚の死骸などを餌として食べるため、深海の掃除屋と呼ばれています。私はこの食事風景を「死んだ魚の止まってしまった時間を食べている」と解釈し、餌である死骸を時計に見立てて表現しました。

ダイオウグソクムシは五年絶食しても生き続けられるほど、生命力が強い生き物です。寿命は解明されておらず、その生態の多くは謎に包まれています。時間がゆっくりと流れる深海で、その身体の時が二度と進むことのない死骸を食べ、ながいながい生を生きる。そんなダイオウグソクムシの不気味で、どこか神秘的な不思議な愛らしさがこの作品を通して少しでも伝わると嬉しいです。

### 瀬戸工科高校 × ぱんだ家プリンカップ制作

吉筋萌 川合史織 梶尾雅姫 前田澄美蓮

#### きっかけ

自分たちが学んできたことを活かして何か地域に貢献できることはないかと考えていたとき、瀬戸の商店街の過疎化が問題にあがった。そこで私たちは、商店街の瀬戸やきそば屋さんである「ぱんだ家」とコラボをし瀬戸らしさのあるイベントを行い、商店街を盛り上げたいと考えた。

#### 完成目標

私たちはぱんだ家オリジナルデザート「せとラーナ」のカップを作らせていただくことにした。せとラーナとはクレマカタラーナというデザートを瀬戸焼の器に入れたものであり、カップの器は持ち帰ることが出来る。



せとラーナ

せとラーナの平均販売数は5〜6個とのことだったので、発売日を本校130周年の記念イベントである10月15日に合わせ10個限定で販売することにした。また、カップはより製品に近づけるため型成形でカップを作ることにした。

#### 作業工程

カップのデザインはぱんだ家公式キャラクターである「うなぎーによ」と瀬戸工科マスコットキャラクターの「にやわんロボ」と、本校の130周年記念ならでのコラボデザインにした。

決定デザイン



- ①カップの型作り  
石膏ろくろで原型を削り、カップの型を作成
- ②鋳込み  
型に鋳込み、数十個ほどカップを作成
- ③着色  
最初は織部釉で着色したが、釉薬が濁ってしまい転写シートが上手く発色しなかったため、顔料をコンプレッサーで吹き付け着色をした。
- ④施釉、本焼成
- ⑤転写シート、最終焼成  
焼成後のカップにシルクスクリーンで作った転写シートを張り付ける

カップが無事十個完成

#### 活動報告

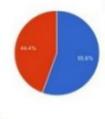
10月15日にイベントを無事終了。結果として用意した10個中9個購入していただいた。

通常営業では5〜6個の売り上げ数だったため、この結果から商店街の活性化に貢献できたのではないかと考えられる。

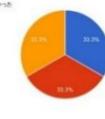
#### アンケート結果

- ・もっと違う色のバージョンもあると良い
- ・使いやすいサイズ感
- ・デザインに瀬戸の特徴を入れてほしい

カップのデザインが気に入りましたか？



カップのサイズが気に入りましたか？



#### まとめ

今回のコラボを通して、瀬戸の商店街の良さを発信できる良い機会だと思った。完売には惜しくも至らなかったが、イベントを機に初めてぱんだ家さんの焼きそばを食べた方もいらっしやう、当初の目的通りの成果を上げることが出来たと思う。また、このイベントをきっかけにして少しでも商店街が活気づくことを願っている。

【寸法】 B1 サイズ (横 728mm × 縦 1030mm)

## 瀬戸工科高校 × ぱんだ家プリンカップ制作

出品者所属・氏名：瀬戸工科高等学校・吉筋 萌 川合 史織 梶尾 雅姫 前田 澄美蓮

瀬戸の商店街を盛り上げることを目的に、商店街にある焼きそば屋の「ぱんだ屋」とコラボレーションを行った。焼きそばとセットで販売するデザートカップを1日限定で10個の販売を目標に、鋳込み成型とシルクスクリーン技法を使って制作した。石膏ろくろを使い石膏原型を制作し、鋳込み成型後織部釉で施釉を行った。その後、生徒たちがデザインした図案をシルクスクリーンで印刷し、転写シートを貼り付け焼成したが図案が上手く発色しなかった為着色方法を変更した。エアスプレーで顔料を着彩した後、転写シートを貼り付け焼成し商品とした。実際の販売では9個の売り上げがあり、地域の活性化に貢献できたのではないかと考えられる。

## ハイドロボールの研究

清水なほ 杉本絢音 竹重麗心

- きっかけ** 水耕栽培で野菜や観葉植物を育てる際、ハイドロボールの色味が茶色系に限られてしまいます。そこで、色にとらわれないハイドロボールを増やしたいと考えたからです。
- 目標** 赤、緑、紺のカラーバリエーションと三角錐型のハイドロボールをつくり、家具に合わせてハイドロボールを選択できるようにすること、学校にある粘土と身近にある有機物で多孔質を再現することです。

ハイドロボールとは… 土を使わずに植物を育てる水耕栽培で用いられる人工の石



### 主な活動内容

#### ①多孔質粘土づくり

植物の育ちやすい多孔質を研究するため、身近にある調味料(有機物)を荒土、半磁器土に種類ずつ混ぜ合わせた。



小麦粉、片栗粉、木くず、塩、砂糖を荒土、半磁器土にそれぞれ一つずつ混ぜ合わせ、小さく丸める



種類ごとに分けて保管



片栗粉のハイドロボールが紛失→種類別の管理が不十分だったため、片栗粉を省くことにした  
塩のハイドロボールで育てたディルが塩害によって枯れてしまった→ハイドロボールをよく洗い塩を落とし再チャレンジ  
液体肥料が日光によって温まりすぎてしまい苗が枯れてしまった→ディルの苗が足りなかったため、シソを代用した



塩のハイドロボール(赤)だけディルが枯れてしまった様子



シソの成長の様子

ディル、シソの育ちが良かったので木くずと荒土の組み合わせに決定

#### ②カラフルなハイドロボールの制作

研究結果をもとに粘土に顔料を混ぜる



木くずを混ぜた荒土をしびきで薄く切る



粘土の表面に顔料を付け、混ぜてひとまごにする



粘土を直径8~10mmの大きくなるように丸める



他の色も同様に行い、乾燥、素焼きを行う



完成

### 研究結果と反省点

先生に口頭でディルの成長の様子を教えていただき、その情報から顔料を練りこむ粘土を選びました。しかし、試作したハイドロボールでディルを育てる時期が夏休みと重なってしまいました。班員のスケジュールや各家庭の日照条件などの問題もあり、植物の成長を記録に残すことができませんでした。試行錯誤の末、無事カラフルかつ機能性のあるハイドロボールを作ることができました。これにより部屋の雰囲気や家具にも合わせやすくなったと思います。地道な作業が多く大変でしたが、製作した甲斐があったなと思いました。

【寸法】B1 サイズ(横 728mm×縦 1030mm)

## ハイドロボールの研究

出品者所属・氏名：愛知県立瀬戸工科高等学校・清水 なほ 杉本 絢音 竹重 麗心

野菜や観葉植物を育てる方法で、ハイドロボールというセラミックの素材を使用する水耕栽培があることを知った。ハイドロボールの色味は、土の特性で茶色に限られてしまうという問題点に着目し、色や形にとらわれずどのようなインテリアにも合うハイドロボールの研究を課題研究で行った。

色味と形にバリエーションを作り、家具や部屋の内装に合わせてハイドロボールを選択できるようになれば、より人々の生活を豊かにし、植物を身近に感じることができると考えた。

植物を育てやすい多孔質にするため、混ぜる粘土や有機物の種類を複数実験した。日光の当たりすぎが原因で、途中で植物が枯れてしまうなどの失敗はあったが、置いてほしい部屋のイメージを基に顔料を混ぜて、試行錯誤の末カラフルなハイドロボールを制作することができた。色味と形状の工夫をすることで、機能性だけでなく、デザイン的に空間を楽しめるハイドロボールを提案した。